
世界のメシア様とメシア様の英雄様

森永 ギャバン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界のメシア様とメシア様の英雄様

【Nコード】

N4941U

【作者名】

森永 ギヤバン

【あらすじ】

俺、春永悠樹と幼馴染の深山日和は2011年の世界から4024年の未来の世界に呼ばれた。そこで『教皇』を名乗る男から自分たちが滅びるを言われた世界を救うために未来の世界に呼ばれたこと、召喚時に求めた『この世界を救う救世主』と『百戦錬磨の英雄』の条件に当てはまったのが自分たち二人だったことを説明される。

……と言われても、もともと普通の高校生の俺たちにいったい何が

できるんだ？

世界を闊歩する異形の生物『魔獣』

世界救済を行うメシアを崇拜する『教団』

滅亡を賛美し終末思想を説く『帝国』

世界を救う『メシア』

そして、役割の指定されない『英雄』

未来の世界で、俺たちの日常は非日常になった

プロローグ

歪んだ世界の中にいた。視界は不明瞭で体は宙に浮いているような不思議な感覚に支配されている。

ここがどこなのか、それどころか天と地、上下左右すらわからない、そんな世界の中に俺と彼女はいた。

彼女の姿だけがはつきりと見えている。

俺はうまく動かない体を必死に動かし、彼女に近づいていく。

近くて遠い、人の心のようなもどかしい距離を何とか縮めようと俺は手を伸ばした。

—— ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。

よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、

久しくとどまりたるためしなし。

世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。——

方丈記の一説が頭を過った。

時間は過去から未来へ、前へ前へと進んでいく。人は生まれると同時に老い、そしていずれ死んでいく。季節は流れ景色は移ろい、時は二度と同じ瞬間を刻まない。いろいろなものが変わり続けていく、それが世界の理。

だけど、それでも変えたくないモノがある。

だから俺は叫んだ。

「日和！」

俺の声が彼女の名前を呼ぶ。

「悠樹！」

彼女の声が俺の名前を呼ぶ。

お前がいるから俺は生きていたい。誰よりも近くにいたい人だから離したくない。

『そばにいてあたりまえ』

それがどんなにエゴイスティックな想いなのかは承知している。
でも、それほど俺はお前のことを必要としているんだと、そう感じている。

それが、俺の変えたくないモノ。

「悠樹！」

彼女はもう一度俺を呼び、こちらへと腕を伸ばす。

俺はそれに応える代わりにその腕を俺は掴み、力強く引き寄せる。
繋いだ手のぬくもり、それが何よりも暖かく愛おしく感じでもう
二度と彼女を離したくない、そんな衝動に駆られた。

——いつまでも一緒にいてくれ

そう口にする前に意識が途切れた。

にダルく感じてしまう。

無駄な思考を終え、目の前に続く道を落胆しながら見る。なだらかな上り坂が目測500mくらい続いている。うちの両親と学校は何故こんな苦行を俺に強いるのか……と、恨みを込めつつ自転車を漕ぐ。しかしさすが坂道、漕ぐ力の割に自転車は思ったように進まない。無駄に体温が上がり汗がダラダラと滝のように流れる。

坂の途中、電光掲示板の気温表示が目に入る。

37

本当に6月の気温なのかと一瞬目を疑う。そして今こそこの言葉を残そう。

「冬、マジ最強！」

叫ぶ。

わかっている。冬になったら『夏、マジ最強！』と言うことはわかっている、そしてそれがどんなにバカっぽいことかも。しかし、だからこそ言いたくなる。

「早く来い！ 冬！」

太陽に向かって叫ぶ、まだ夏すら来ていないのに。

傍から見ればアホだ。いや、傍から見なくてもアホのやることだ。だけど叫ばずにはいられない、人間って言うのは自由な生き物なんだからそれくらい許して欲しいところだ。

「な〜にバカなこと言ってるの〜？」

左後ろを走っている車から声がして追い越していく。よくCMで目にする最高燃費が38km/lのエコカーだ。銀色の車体が太陽の光を反射して一瞬目に当たる。……超眩しい。

車はハザードランプを付け、俺の前で止まった。そして一人の女性降りてきて涼しげな顔で一言。

「暑そうだね〜悠樹〜」

春永悠樹。俺の名前だ。

県内で二番目の進学校の高校に通い、日々をただ面白おかしく過ごし、時に泣き時に笑うどこにでもいる普通の男子高校生だ。自分

で言うのもなんだが中肉中背、顔も中の中、特筆すべき特技も無し。寧ろ至って普通というのが自慢だ。

……そんな俺が一つだけ普通じゃないところがあるというなら。

「日和……そう思うんだった乗せる！」

それは目の前の美少女だ。

彼女の名前は深山日和。俺のはす向かいに住む同級生。いわゆる幼馴染……というか腐れ縁だ。

バランスのとれた輪郭に丸い二重の瞳、実に整った顔立ちだ。そして手入れの行きとどいた長い黒髪は白いカチューシャと白を基調とした夏用のセーラー服と相まって清楚なイメージを確立させている。と、清楚なイメージの割にプロポーションは良く、出ているところ、おもに胸とかは出ていて凹むところ……つまりはウエストは凹んでいる。

彼女のスペックを少し紹介するならば……

・陸上大会で未だ破られていない長距離走の記録保持者

・一学年300人程の高校で常に上位の頭脳

・美声。驚くほどに。優しく滑らかな口調でヒーリングボイスとまで言われている

ええ、あれですよ。世に言うパーフェクトビューティーってやつですよ。

そんな奴を放っておく男など居るはずもなく、噂によると告白の雨嵐らしい……

なんだってそんな奴が俺の近くにいいのか……こいつのせいで世の中の女性のほとんどが普通如何に見える。俺に彼女が出来ないのはきっと日和のせいだ！ そうだ！ そうにきまっている。

と、少し恨めしい視線を送りつつ回答を待つ。

「……不許可！」

ちよつと勿体ぶって結局乗せてくれないそうだ。世の中世知辛い

……

「何故だ！ why！ 理由を明確に！ 簡潔に述べろ！」

「コンビニ寄りたいたからここで降りる」

即答、そして驚くほど明確で簡潔だ。返す言葉も無い。

「じゃあ兄さん、そういうことでよろしく」

日和は車に向かって手を振る。そして車はハザードランプを消しゆっくりと発進する。

日和に習い俺も手を振る。

—— さよなら、俺のサンクチュアリ…… 果てなき遠き理想郷よ……

最初から期待はしていなかったが、少しは落胆しつつ自転車のハンドルに手を戻しペダルを踏む。

「じゃあ日和。俺帰るから…… あれ？」

思った以上に進まない。坂道とかそういうのを除いて普通に重い。明らかに異常事態にパンクを疑った俺は後ろを向く。

「じゃあ運転手さん、よろしく」

そこには荷台に座り、これまた今日の日差しとはちょっと違った明るい顔をした日和の姿があった。

「あつるえ〜？」

「なに不思議そうな顔してんの？ ほら、しゅぱ〜っ」

「…… 解せん」

おかしい、乗せると言ったのは俺のはずなのに乗っているのは日和の方…… これ如何に。

「なんで車じゃないんだ？」

「いや〜、青春だね〜」

「うるさい、だまれ荷物！ 質問に答えろ！」

「自転車には乗りたい、でも自分では漕ぎたくない。以上」
すごい理屈だ。絶対俺以外には通らない。

「この暑い中なんで余計なものを乗せて俺は走らなきゃならんだ？」

「ここ、私の特等席」

いつの間に俺の自転車の荷台は日和の特等席になったのだろうか？

「なにそれ初耳」

「そりゃあ今初めて言っただし」

そうですよ。と、問答するのもめんどくさくなり前を向く。

坂道はようやっと半分ほどまで登ってきたところ、近くのコンビニまでは坂を上り切り少し下ったところだ。

一度深く深呼吸しハンドルを強く握る。

「……アイスでも奢れよ」

「もちろん！ ほら早くいけよ」

フン、という鼻息とともに今日一番の力でペダルを踏むとゆっくりと自転車は動きだし徐々に加速していく。

「お、さっすが男の子」がんばれ！」

後ろからは日和の黄色い声援が聞こえる。俺は少し調子に乗って更にペダルを踏む。

自転車は風を切り始め、少しだけ涼しい風が頬をなでる。

いつも日和の言うとおりにしてしまるのが通例。大人びたのは外見だけでそういう中身のところは子供のままでなかなか変わらない。いままでずっと続いてきたこの関係が正直言って何よりも楽しかった。

「結局、俺も楽しいんだよ！」

本当は不満なんて無い、こうして何気ない日常を過ごすだけで十分だった。

「私も楽しい！」

きつと日和もそうなんだと、そうあってくれると嬉しいと思う。

こんな日々がずっと続けばいいと、そんなことを考えながら俺は自転車をこぎ続けた。

ミンミンゼミがすこしだけうるさく鳴いていた

その1：これがメシア様と英雄様の日常（後書き）

以上、一話目でした。

閲覧いただきありがとうございます。次回も読んでいただけると大変うれしいです！！

しかし・・・キャラ紹介レベル。石投げるといい！

その2：さよなら日常

「あ、ここにしよう悠樹」

コンビ二袋を持ちながら日和が指さしたの公園だった。公園とは言うが遊具は無く、あずまやと小さなベンチがあるだけの、寧ろ休憩所みたいな場所だ。

俺はあずまやの前まで行き自転車を止める。

「あ、蝉」

袋をあさりながら日和は呟く。

ミンミンミンミンミンミン……ン

柱に止まり蝉が鳴いている。近い分余計煩い。

「はい、アイス」

日和はあんまり気にしていない様子だ。大らかというか、なんと
言うか……

そんなことを思いつつ受けとる。受け取った袋には『ガルガルくん』と銘打ってあり火をふきながらアイスをもつ怪獣の絵が描かれていた。このアイスを買った時に思うんだが、冷たいのが売りのアイスなのに怪獣に火という組み合わせはどうかと思う、ちよっと暑苦しい。と、そんなことを考えつ袋を開けると中には薄い青色の棒付きアイスが一本。袋とは正反対に実に涼しげな色だ。

アイスに齧りつくと、ガリっと言う氷をかみ砕く音ともにキンとした冷たさとソーダ味の甘みが口に広がった。

「うまい！」

もう一口齧り味わいながら咀嚼する。ソーダ味の氷をかみ砕く度に冷たさが体にしみわたる。

暑い中で食べるアイスというのは何故こんなにうまいのだろうか。成人男性の暑さの中の楽しみが冷えたビールならば、俺たち未成年

にとってはこのアイスが暑さの中の楽しみだと俺は思う。

「おいしいね」

日和が口に運んでいるのは少し高めのカップ入りラクトアイスだ。箱入りアイスの棚に並んでいる単品もののアイスだ。あの高級感溢れるブランドもの（？）のアイスをパクパクと軽快に食べている。

「お前のそれ邪道！」

ビシッという効果音が聞こえそうなほどに力強く日和を指さす。

「えゝなんで？」

「いいか！ 世間一般の高校生つてのは金がないんだ！ 質より量！ これが鉄則！ 見るよ、このガルガルくん（ソーダ味）のコストパフォーマンスを！ こんなに大きくて60円だ！ 対するお前のハーゲンダツチヨはどうだ？ そんな手に収まるくらいの小ささで400円だと……って言うか高いの食うならもつと味わつてくえ！」

「だって溶けるじゃん」

「だって脱兎もダディもねえ！ お前敵だ！ 全国の高校生に謝れ」

「もしかして、食べたいの？」

「……はい、そうです、すいませんでした」

「せっかく奢ってあげるんだから遠慮しなきゃいいのに」

「いや、ほらあれですよ。小心者なのでただ安く済ませよう済ませようという変な遠慮が体に染み付いてしまってますね……」

「はあ、幼馴染なんだから遠慮なんていいのに……ほら、あゝん」

そっぴいながら顔に接近してくるアイス……と、日和。何故顔まで近付ける！

「やっぱいいい！」

3歩ほどバックステップ。全力で、それこそ脱兎のごとく。

「食べたといって言ったよね？」

それを追いかけるようにズスイと間を詰めてくる日和。目にはやや怒りの色が見える。

いくらなんでも間接キスとか考えてしまう訳でさすがに恥ずかしい、というか照れる。

「変なの……あ、そういえば悠樹、進路決めた？」

俺の気持ちはどこ行く風、という感じに唐突に話題変更。日和が取りだしたのは進路調査票だった。……おかげ様で一気に熱が覚めました。

俺は『あゝ』と、言葉を濁しながら空を見る。いつもと変わらぬ青さが広がっていた。

高校三年生の6月。普通なら志望校を決め、合格を目指し必死に勉強している時期のはずだ……が。

「決めてない」

なんというか今まで流されて生きてきたせいか、俺には主体性というものが欠けているらしく、何が勉強したいのか、何になりたいのか、明確に無い。

だから進路希望も真っ白。今日も担任に呼ばれて説教を受けてきたわけで……

「そういう日和はどうだよ？ 人のこと言うってことは決まったんだよな？」

「もちろん決まってるません！」

胸を張り、元気よく答える。はいはい、大きい大きいそこまで強調しなくていいから、と突っ込みを入れながら、それもそうだと納得する。日和も日和と一緒に同じ要件で担任から説教を受けてたし。「お前の学力ならいいところ行けるだろ。なんだって決めないんだよ」

「悠樹が決めたら決めるよ。同じところ行く」

「はあ？ なにそれ？ じゃあ俺が東大行くって言ったら東大受けんのかよ」

「私は受かるかもしれないけど悠樹は無理でしょ」

「うっせ！ 無理じゃないし！ やっぱ俺って不可能を可能に！ って言ってるし！」

「出来るもんならやってみろ」

「ていうか、なんで俺と同じとこだよ」

素直に疑問。なんにも得は無いような気がする。

「いや、まあそれはね……」

日和は立ちあがり俺に背を向けた。

「秘密！」

「はあ……まあ俺が単位落としそうになった時に助けてくれるような人がいれば確かに楽だけどよ……」

「ふふふ、でしょでしょ！ だから早く決めてね！」

そう言つと日和はくるつと振りかえり満面の笑みを浮かべる。夕焼けを背景にしたその姿はまるで絵画のように美しく、どこか幻想的だった。

なんでだろう、今しか見ることが出来ないのが勿体ない気がするけど、その反面この光景を見ることが出来るのが自分だけということと同じくらい……なんでもない。

——英雄様

脳内に声が響く。

「え？ 日和なんか言ったか？」

「キヤーーーー！」

日和の悲鳴が響く。

「日和？」

日和の体が光に包まれ苦しんでいた。

その異様な光景に俺は咄嗟に日和の腕を掴んだ。

——百戦錬磨の英雄

さっきと同じ声、男とも女ともとれない声が頭に響く。それと同時に痺れと痛みが体を駆け巡った。まるで電気が体を流れたかの様

な感覚に一瞬気が遠のいた。

「なんだよ、これ」

周りの景色がぐにやぐにやに歪んでいき、体のいろんな感覚が奪われ自由が利かなくなっていく。

「ゆう……き」

日和の弱い声が聞こえた。日和の方を向いた瞬間、世界から色が消え全てが歪んだ世界に飲み込まれた。

もう、蝉の声は聞こえなかった

その2：さよなら日常（後書き）

というわけで前座終了。

小説って難しいと思いつつとても勉強になります。

未来その0：変わらないものと変わったもの

++++++
++++++

行為の英雄というものはない。ただ諦念と苦悩との英雄がある。

—— シュヴァイツァー 「自叙伝」

俺は、この世界で何をすればいいのか誰も答えてはくれなかった。
ただ悩め、迷えと苦難ばかりを与えるだけだった。

++++++
++++++

「ねえ悠樹。私魔法使えるらしいんだ」

普通なら何を寝言を言っているのかと小突きたくなるところだが

……

「お前……何そのファンタジー」

日和の手の平に何やら赤い発光球が浮かんでいる。

「え、魔法……だよ？」

まるで当たり前だとも言わんばかりの顔で平然と答える日和。

「いや、そんな平然とされても」

現実離れしすぎて何が何だか……入ってくる情報が処理しきれない俺。そしてあっさり順応する日和。果たしてどっちが正しい反応なんだろう？

「出したのはいいいんだけどこれ……どうすればいいの？」

「しらんがな」

その質問は例えるなら某ネコ型ロボットに自分が出した道具の使い方を聞かれているような、何を言いたいかって言う……答えようがない。

「……ねえ悠樹、ちよつとそこで待つてて」

何かを思いついたようにそう言つと駆けだす日和。10mくらい走つたところでくるつとまわれ右、こちらに振り返る。

「いづくよ」

ピッチャーよろしく、大きく胸を張り振りかぶる日和。だから何故そんなに胸を強調するのか……と、そんなことを考えた瞬間。

「直球！ すとらーいく！」

俺に向かつて全力投球。いや、おいまて……

「投げるなー！ ばかー！」

反射的に体を横に投げ出し回避。弾速があまり早くなかつたせいか余裕で回避、地面に伏せながら安心のため息がでる。

「何で避けるの？」

「正体不明の物体飛んできたら誰だつて避けるだろうが！」

避けて何もなかつたから良かったものの、もし当たつて怪我でもしたら……

ドッコーン！

「え、爆発音？」

俺の後方で聞いたことのないような豪快な爆発音、そしてそれに続いて何かが崩れていく音が聞こえた。恐る恐る後ろを向くと焦げた色の砂礫が散乱していて多分大本であつたであろう岩が無残に挟まれていた。

あれが俺に当たつていたらと、一瞬想像……そして流れる冷や汗。

「あれは爆発するのか……覚えておこう」

俺の心日和知らず、なにか納得するように頷いている。

「……当たつたらどうするつもりだつたんだ？ 一応聞いてやる、言つてみる」

うまく呂律が回らない。いままで聞いたことのないような大きな音で心臓がバクバクいつている。

「その時はその時。きつとなんとかなるよ」

お得意の満面の笑みを浮かべ親指を立てながらポーズを決める日和。可愛い、そう確かに可愛いがとてもムカつく。だから叫んでいた。

「なんねーよばかー！ 殺す気かー！」

空に向かって全力で叫んでやった。

未来でも、青く澄み渡った空が広がっていた。太陽も暑く光り輝いている。俺たちがいた現代と何一つ変わっていないかった……

でも、蝉の声は聞こえない。ただ、静かに世界は進んでいた。

未来その0：変わらないものと変わったもの（後書き）

ここからが一話目。こんかいは一話目のプロローグといった感じですよ。

ここからが本番……うまく表現できるように頑張ります。

未来その1：ドキドキ時々ズキズキ、のち未確認生物

さて、ここで何故日和がこんなファンタジーを手に入れたか順を追って説明しよう。

そのために、まずはじめに時間を日和が発光球を投げるちょうど2週間、俺たちがこの未来の世界にやってきた時まで遡ろう。

（二週間前）

歪んだ景色と意識がこれまた唐突に元に戻る。が、そこは明らかに室内。

「……ここ？ 教会？」

辺りを見渡しながら呟く日和に習い、俺も周囲を観察する。

最初に目についたのは、自分たちの立っている場所よりすこし高い場所にある祭壇だ。金の装飾が施された二股の燭台が二つおかれていて火が灯っている。そして祭壇の後ろには金色の巨大な十字架があり日の光を反射し眩しく輝いている。所々に採光用と思しき窓があるがカーテンが見当たらない、そして足元には赤い絨毯、よく映画祭とかの中継で要人が歩くような赤絨毯に似たような感じた。視覚から得た情報を統括すると確かに日和がいったように教会と言われれば教会だ、と言えなくもない。その上で敢えて言うが、明らかにさっきまでいた公園ではない。

「ねえ悠樹。このシンボル……見たことある？」

日和が祭壇に刻まれているシンボルを調べていた。

羽のついた杖に絡みつく二匹の蛇。なにかで見たことがあるような気がするんだが思い出せない。

「それはケリーリケイオン。伝令使の杖を意味する我が教団のシンボルにございます」

低い男性の声と共に背後にあった扉が開く。

「未来の世界へようこそお越しくださいました！ 歓迎いたします、メシア様と英雄殿」

シンボルと同じ形の蛇が二匹絡みついた杖を持ち、赤いマントを羽織った初老の男性が入ってくる。

男は俺たちの前まで歩いてくると最初に日和を、次に俺を観察するように見ると顔を緩ませ深々と頭を下げた。その姿を見てから。

「はあ！ 未来の世界だ！？」

男の行動には何の関係も無い、未来（仮）に来てからの俺の第一声が響いた。

「ええ、お二人にも解り易いように『西暦』で表現しますと4024年……になりますかな」

俺の叫びと心境など意にも介さない、とばかりに立つ淡々と続ける。

「メシア様と英雄殿にここに来ていただいたのは他でもありません。この世界を救っていただきたいのです」

「おいおい……新興宗教かなんか？ おっさん、いい年なんだからファンタジーも程々にしてくれよ……もしかして誘拐？ 目的はなんだ？ まあ確かに金が目当てなら日和を誘拐したのは正解だが……俺のほうは不正解だぞ。ああ、そうか。新興宗教だから信仰とか教徒が足りないんだな？ そういうのはお金で買えませんか？ 欲しいんだったら街角でキャッチセールス紛いか人さらい的な行動してください。もれなく警察屋さんがついてきますから！」

舌が人生で最速、フルスロットルする。相当な早口でしゃべっているのに一度もかまない。

「もしかして悠樹……混乱してる？」

「ええ、テンパってますよ！ 突然こんな教会みたいところに連れてこられて、やれ未来だ、メシアだ英雄だ……なんて言われたら混乱するだろうに！ 言っていることが珍妙奇天烈すぎて脳の処理がおっついてませんよ！ なんですか！ 俺の脳味噌をデッドロックする気ですか！？」

凶星の一言に人生最速のフルスロットルその2。正直言っても自分が何を言っているのかわからない。果たしてちゃんと意味の通った文章になっているのかも怪しい。だけど、突然こんなところに連れてこられて混乱しないという奴がいればそいつこそ普通じゃない。

「……悠樹、悪い癖。ちよつと落ち着いて！」

怒声に近い日和の声とともに なにやら鈍い音が鳩尾のあたりで聞こえた。そして少しの間をおいて衝撃が襲う。

……日和の右拳が体内に侵入しているんじゃないかと錯覚するほどめり込んでいた。

「ハイ、深呼吸」

「イヤ……ムリ」

日和のモーションに合わせ深く息を吸うと鈍痛が走る、いや走っていうよりも歩くと表現したい、それも牛の歩みのように鈍く重い。

「落ち着いた？」

「……落ち着くより先に意識が飛んでいくような気がする」

「焦って熱くなったら相手の思うつぼ。こういうときは冷静に冷静に、ね？　ここは私に任せて」

「この状況で俺が何か出来ると思ってるのが不思議……」

「ちよつと手ごたえが良かったな」と思ったけどそこまで何か言えれば大丈夫だね」

「顔が青いのですが……本当に大丈夫なんですか？」

「はい、慣れっここですから」

慣れてないから、と突っ込みたいところではあったが声が出ないので大人しく沈黙。

「悠樹の件は置いておくとして、貴方が言っている事は本当なんですか？」

男へと振りか向きながら日和は問う。その声には少し威圧のよう

なものを感じる。

「はい、すべて本当です。嘘偽りはございません」

「『それを証明しろ』と言ったら今すぐに出来ますか？」

「……少々難しいのですが」

「『簡単』か『難しい』かを聞いてるんじゃないやありません。『出来る』か『出来ないか』を聞いているんです」

「な、何を持って証明をすればいいのでしょうか……」

「そんなのは貴方に任せます。もし、出来ないのであれば私たちは貴方に対し一切の協力を行いません。いざとなればここで命を絶ちます」

そう言つと日和は制服のポケットから刃物を取り出し首元に近づけた。

「え、日和……まじで？」

「もちろん本気だよ？ 仮にあの人の言ってることが本当だとすれば、私たちがここで死んだら世界は滅びる。逆にただの誘拐・人攫いだとすれば私たちが死んだ時点で価値は無くなるでしょ？ どっちにしろあいつにとって事態は好転しない……」

「た、確かにそうだけど……俺も道連れ？」

「うん、一緒に死んでね」

最上の微笑みと共に刃物を俺の喉元に近づける日和。

動脈付近に刃が触れ、ゾツと何かイヤゝな寒気が背中を走る。

「と、言っわけで私たちの意志はこんな感じですが、どうしますか？」

「ちょ、ちょ日和！ マジで？ 本気？ 俺を殺すの？」

「あの人の出方次第ではそうなるね。大丈夫、私もすぐ行くから」
顔は笑っているが目は笑っていない。本気だ。

「お、おっさん！ 早く！ なんとかして！ 俺の命がマジでヤバいから！！」

「わ、わかりました。少々お待ちください……」

そう言つと男はゆっくりと歩き退室する。それを確認してやっ

日和は刃を離した。

「……死ぬかと思った。違う、殺されるかと思った」

「ペーパーナイフじゃ切れないから大丈夫だって。本気にした？」
そういうと刃部分を手の平に当て勢いよく引いた。

「……キレてないっすよ？」

「悠樹と心中っていうのもいいけど、やっぱり死ぬのは嫌だからね。ほら、死んだらその先無くなっちゃうし、勿体ないから」

「お前、そんなこと言う奴だったっけ？」

「私だって頭がこんがらがってるのよ。悠樹が言ったようにいきなり未来だ、世界だ、なんて言われて平静を保てるほうが普通じゃないわよ」

自分が前例であるだけ確かにその通りだと思う。しかし、だ。

「痛い……なんか呼吸難しいんですが」

死の危険が去った途端、急に鳩尾の辺りがまた痛み始めこれまたイヤゝな感じが胃の中をぐるぐるしている。

「大丈夫？ どうしたの？」

「お前が殴ったんだよ!!」

「あ、そう言えばそうだったね。まあまあ良くあることじゃない」

「良くないし！ というかあってたまるか！」

「うゝん？ キスしたら痛くなくなる？」

「……お前、本当に頭大丈夫か？」

さらっと爆弾発言したような気がするがそんなことなどど吹く風、俺の顔を包み込むように両手で支える日和。

「……いや、ちょ、ま。日和さん！ 正気ですか？」

「大丈夫……私に任せて……」

そう言つと日和は少しづつ顔を近づけてくる。

可愛い、というよりは美人といった方が良い顔の上ですこし潤んだ黒い瞳が日和が緊張している事を物語っている。一方の俺も心臓が高鳴り徐々に速さを増していく、正直言つて心臓が飛び出しそう

だ。

「ま、待ってって!!」

「何を？」

「いや、確かに日和は美人だし俺だって綺麗だと思うぞ!? でも、こういうのって恋人がするもんだろ!」

「……イヤ？」

日和の目が緊張から悲しみの色に変わる。

「だ、だからこういうのは好きな人とやれ! って言ってるの!」

「いいから、目をつぶって?」

もう、儘よ。と目を閉じる。後は野となれ山となれ。

・・・

静寂の中俺の心臓の音がヤケに大きく聞こえる

・・・・・・

顎のあたりに当たる日和の手の感触がむやみやたらに柔らかくて

気持ちいい

・・・・・・

にしても長すぎないか? と思った矢先

ゴスン!

静寂を破る鈍い音。先刻鳩尾の辺りで響いた音とはまた違った鈍い音だった。

「いって……なにすんだよ……」

「頭突き。ほら、更に痛い衝撃が来るとそれより弱い痛みって忘れるじゃない? だから悪戯と趣味と実益を兼ねて頭突きしてみた!」

確かに痛みは頭の方が気になるが根本的な解決になってない気がする。

「お前なく、俺のドキドキどうしてくれるんだ!」

頭をさする。そして日和をにらむ……と、何故か日和は泣いていた。

「痛いならやるなっのに……」

「違う……怖いの」

「は？」

日和は肩を震わせながら泣いていた。

「さつきは強がつてたけど、突然訳のわからないこといろいろ言われて……もう、何が何だかわからなくて怖いの！」

声が震えていた。何か張り詰めていたものが切れたようか、今の日和からは先程までの元氣と威勢が消えていた。まるで迷子の子供のように不安にすべてを支配されている、そんな雰囲気だ。

「ねえ、悠樹……これからどうなるの？」
「すぐるような眼で俺を見る日和。」

「わかんねえ……でも、どうにかなるさ」

何の確証もないのでそれしか言えなかった。なんというか我ながら情けない。

「……本当？」

「今までとは状況は違うけどさ、なんとかならないことなんてないんじゃないか？ ほら、俺が全然やってない夏休みの宿題を最終日に気付いてもなんとかなるだろう？」

「それは、いつも私がなんとかしてた……から」

「……じゃあ今度は俺がなんとかしてやる！ だから泣きやめ！」

「本当？ つ本当に？」

「頼りないけど……少しくらいは期待に添えるように頑張る」

「そこは嘘でも『俺を信じろ』とか言おうよ」

小さな笑い声を含んだ日和のダメ出しが飛んでくる。少しは持ち直したらしい。

「残念ながらお前にだけは嘘をつけなくてね。100%どうになる、とは言い切れないから努力だけするってことで許してくれ」

「……仕方ないな、これで許してあげる！」

そう言つと、日和は涙を拭き俺へと体当たりするように抱きつく。
「信じてるよ、悠樹。」

「あ、あの〜。お二方……よろしいでしょうか？」

「な！ あんたいつの間に！？」

突然の声に半ば引きはがすように離れる。
気がつくときさっきの男が戻ってきていた。

「結構前からでしたか……お邪魔でしたか？」

「ぜ、全然。で、証拠は持ってきたんですか？」

日和が答えるが呂律がうまく回っていない。凄味も何もあつたものじゃない。その姿は親に隠していたテストを見つけられた小学生を彷彿とさせた。

「お待たせしました。証拠……となるかわかりませんがお持ちしました」

そう言つた男の後ろには透明なカプセルを乗せた荷台があつた。

「ご覧ください……これが私たち人間の生存を脅かしている、世界を滅亡へと追い込んでいる者たちです」

「おいおい……マジかよ」

冷や汗が頬を流れる。

敢えて例えるなら、真つ暗な部屋でお経をバツクにとびきりの怪談を聞かされているような……そんな戦慄が、カプセルの中身を見た瞬間に走つた。

カプセルの中に入っていたのは見たことのない生き物だつた。体の大きさとか四肢があるという基本構造自体は人間と同じだが、明らかに翼のようなものが背中から生え、両腕が禍々しい槍のような形をしている。

まるでゲームに出てくるモンスターのような、そんな感じだ。

「なにこれ……生き物なの？」

「少なくとも数日前までは生きていた、そういう意味では『生き

物』でした。恐らく貴方達の過ごしていた時代には存在していなかった、と思い証拠としてお持ちいたしました」

生きていた……これは模型とか、人間の死体に後付けされたものではない、という事……つまり、現実。

「なんなんだよ……これ」

「世界滅亡の原因の一つ、魔獣です」

——魔獣

男が呟いたその単語だけが、いつまでも俺の頭の中で響き続けた。いた。

未来その1：ドキドキ時々ズキズキ、のち未確認生物（後書き）

一カ月以上ぶりでした。

世間は就活とか卒業論文で忙しい中俺も巻き込まれましたよええ。

というわけで稚拙ですが更新かけました〜

これからうまくいきますように・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4941u/>

世界のメシア様とメシア様の英雄様

2011年10月9日07時59分発行